

マレー社のガイドブックを携えて ——“French Life”におけるツーリズム——

志 渡 岡 理 恵

1 はじめに — ギヤスケルの外国旅行

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) が旅を娯楽のひとつとしていたことはよく知られている。彼女はイギリス国内ばかりでなく、フランス、イタリア、ドイツなど海外へも旅をした。特にフランスには 1853 年から 1865 年にかけて何度も出掛けている (Yarrow 17-26)。

ギヤスケルがフランスを旅したのは、イギリスの旅行のありかたが大きく変わりつつある時期だった。近代ツーリズムの創始者と位置づけられているトマス・クック (Thomas Cook) が初めてヨーロッパ大陸旅行ツアーを企画したのは 1855 年、イギリスがフランスと同盟を結んだクリミア戦争の後である。このツアーは赤字に終わり、クックはこの後 1861 年までブリテン諸島の外へツアー客を送り出すことを諦めざるをえなかった。しかし、パリ万国博覧会が開かれた 1861 年、イギリス国民がフランスへ入国するのにパスポートを必要としなくなったこともあり、ヨーロッパ・ツアーの企画を再開する。フランスの鉄道会社がなかなか低価格での契約を承知せず、赤字解消は困難だったけれども、1863 年、フランス西部鉄道との間について合意が成立し、クックはその後 5 年間の間に約 7 万人をパリに送り出すことになる。ギヤスケルはトマス・クック社の団体旅行に参加したわけではないものの、彼女がフランスを旅したとき、旅行会社が企画する団体ツアーの普及によりイギリスの旅行文化は大きな変容を遂げようとしていた。

19 世紀中葉には、現在わたしたちが楽しんでいるようなかたちの観光旅行を可能にするのに必要なアイテムが続々と出揃う。ガイドブックや海外旅行者のための会話集が出版され始めたのもこの時期である。マレー (Murray) が 1851 年に出版した『海外旅行のための会話集』(A Handbook of Travel-Talk) を開いてみよう。本文の最初のページには「税関は厳しいですか」という質問が、左から英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の順番で横一列に並べられている (2-3)。この

会話集には、ホテルや商店など旅行者が立ち寄りそうな場所で交わされると想定される様々な質問とそれに対する答えが、約3百ページにわたって掲載されている。第33章は婦人服店での会話の章で、この章には服飾に関する用語集まで付されている。現在の海外旅行者のための会話集と比べても遜色がないと言うか、質量ともにより充実していると言ってもいいほどのものである。

本論は、ギヤスケルが1862年と1863年にフランスに滞在した時のことを記事にまとめた「フランスの生活」(“French Life”)をとりあげ、当時のガイドブックや、女性誌のフランスに関する記事などを参照しながら、ギヤスケルの旅の仕方やフランスの楽しみ方を19世紀中葉の旅行文化のコンテキストの中で解釈することを目的とする。彼女の旅には鉄道やガイドブックをはじめとする19世紀に登場した旅のツールがどのように関わり、彼女の旅の楽しみ方はどのくらい当時の風潮と一致していたのだろうか。

2. 旅のツール—鉄道とガイドブック

「フランスの生活」は、1864年、『フレイザーズ・マガジン』(*Fraser's Magazine*)の4月号、5月号、6月号に連載された。4月号には、1862年2月から5月にかけてパリの友人宅に滞在したことや、サン＝ジェルマン(St. Germain)へ小旅行に出掛けたことなどが書かれている。5月号には、1862年5月にブルターニュ(Brittany)に旅した時のこと、1863年2月に再びパリを訪れた際に見聞きした事柄、特にフランス革命にまつわる話などが描かれている。6月号では、1863年3月にパリからローマへ移動する途中に訪れた宿で女主人が貸してくれた本—17世紀に起きたガンジュ侯爵夫人(Madame la Marquise de Gange)暗殺事件の裁判記録—から得た知識をもとに、ゴシック小説のおどろおどろしい世界を彷彿とさせる、残忍な殺人事件の顛末が語られている。

この概要から分かるように、「フランスの生活」には、当時のパリの最新の暮らしに関する記述と、パリとは雰囲気まったく異なる、中世の面影を色濃く残した田舎のゴシック小説的な世界の逸話が混在している。この対照的なフランスの田舎と都会の対比については後で詳しく見ていくことにして、まずはこの作品に登場する19世紀中葉以降の旅行文化を大きく変えた二つの旅のツール—鉄道とガイドブック—toに注目し、ギヤスケルがこの2つのツールをどのように利用

したのか確認したい。

まずは鉄道について見てみよう。19世紀になって初めて可能になった鉄道での旅を彼女はどのように感じ、どのように描いているのだろうか。1862年5月12日のヴィトレ (Vitré) に向かう列車内での様子を記した箇所では、旅慣れた様子の語り手 (ギヤスケル) と、見るものすべてに興奮する初々しいアイリーン (Irene) (娘の友人) の姿が対照的に描かれている。

Irene, who is the most wide-awake person I know, sat upright in the railway carriage, looking out of the window with eager intelligent eyes, and noting all she saw.... I sank back in my seat in a lazy, unobservant frame of mind, when Irene called out, 'Oh, look! there is a peasant in the goat-skin dress one reads about; we must be in Brittany now, look, look!' I had to sit up again and be on the alert; all the time thinking how bad for the brain it was to be straining one's attention perpetually after the fast-flitting objects to be seen through a railway carriage window.¹

アイリーンは背筋を伸ばして座り、聡明なまなざしで食い入るように窓の景色を眺め、見たものすべてをメモしている。一方、ギヤスケルはぼんやりと、けだるい気分で座席に身を沈めている。そして、アイリーンに促され、気乗りしないまま景色を眺めつつ、次々と移り変わっていく車窓の景色に絶えず注意を精一杯働かせていることは脳にどれほど悪いことだろうと考えている。ここには、すでに何度もフランスを訪れているギヤスケルの余裕のようなものとともに、鉄道のスピードに急かされて、めまぐるしく変わる景色を見ることへの抵抗感も感じられる。フランスに鉄道が敷かれたのは1837年頃で、1850年にはその距離は2000マイル以上にまで伸びていた。鉄道の普及で移動時間が短縮され、それまで訪れることが難しかった地域にも気軽に出かけられるようになったのは事実だが、ギヤスケルは鉄道を使つての移動自体はあまり楽しめなかったようである。

次にガイドブックについて見ていきたい。以下は1862年5月12日に書かれたもので、ギヤスケル一行はヴィトレに到着し、宿へ向かったけれども、目指した宿がなかったと述べている箇所である。

The inn down in our ten-years-old Murray no longer existed; so we were glad to be told of the Hôtel Sévigé, although we suspected it to be a mere trick of a name. Not at all. We are really veritably lodged in the very house she occupied when she left Les Rochers to come and do the honours of Vitré to the Governor of Brittany – the Due de Chaulnes. (F380)

冒頭の“The inn down in our ten-years-old Murray no longer existed”という部分からは二つのことが分かる。一つは、ギヤスケルはフランスを旅するのにマレー社のガイドブックを利用していたということ、もう一つは、そのガイドブックは10年前の1852年、おそらく彼女が初めてフランスを訪れた際に入手したものであろうということである。

マレー社の『旅行者のためのガイドブック』(*A Handbook for Travellers*)のシリーズは1836年、『大陸旅行者のためのガイドブック』(*A Handbook for Travellers on the Continent*)が出版されたのを皮切りに続々と刊行された。このガイドブックのシリーズは、1国だけに的を絞ったものもあれば、隣接した数か国を網羅しているものもある。また、ガイドブックだけでなく、各国の歴史をまとめたものや、絵画にスポットをあてたものもある。現在ではドイツのベデカー(Baedeker)とともに、近代的なガイドブックの原型と目されている。マレー社からは1836年にまずオランダ、ベルギー、ドイツの3か国のガイドブックが、1838年にはスイスのガイドブックが出版された。フランスのガイドブックの初版が出たのは1843年である(Vaughan 44)。イギリス国内のガイドブックは1851年から出版が始まった。青色の表紙だったスイスの初版以外はすべて赤い表紙だったため、レッド・ガイドという愛称でイギリス国民に広く親しまれた。大きさは8つ折り版で、価格は平均して農業労働者の1週間分の賃金くらい、中産階級以上向けの贅沢品だった。フランスのガイドブックの1873年版を開くと、マレー社のガイドブックが入手できる海外の販売所の一覧が掲載されているが、100を超えるその数の多さからマレー社のガイドブックが当時どれほど普及していたかがよく分かる。

ギヤスケルが「フランスの生活」でマレー社のガイドブックに言及しているのは、先ほど引用した“The inn down in our ten-years-old Murray no longer existed”という一節だけだが、他にもこのガイドブックの存在を感じさせる記述がいく

つかある。たとえば、列車内でのギヤスケルとアイリーンを描いた場面で、すでに引用したが、アイリーンは“*Oh, look! there is a peasant in the goat-skin dress one reads about; we must be in Brittany now, look, look!*”と言っている。彼女は、ブルターニュの農民はヤギの皮を身にまとっているという情報をどこから得たのだろうか。

マレー社のフランスのガイドブック 1873年版のブルターニュについての基本情報が掲載されている部分のセクション3には、ブルターニュに住む人々に関する情報がまとめられているが、そこには次のような記述がある。

The Peasantry are almost as wild as their country, excessively quaint in their costume, wearing broad-brimmed hats and flowing hair, and in some districts trunk hose (bragous bras = breeks) of the 16th cent.; in others wrapped up in goat-skins in winter, like *Robinson Crusoe*, a costume which they retain as it was handed down from their ancestors. (115)

ロビンソン・クルーソーが例えとして用いられているのは興味深いが、ここでは“*wrapped up in goat-skins*”という箇所注目したい。続けてヴィトレの案内のページを見ると、“*The peasants of this part of Brittany wear, during winter, a dress of goat-skins with the hair turned outwards, which gives them a somewhat savage aspect, and reminds one of Robinson Crusoe*” (131) と、同じようにヤギ皮の服に関する記述がある。これだけでアイリーンがマレー社のガイドブックからブルターニュの農民はヤギの皮を身にまとっているという情報を得たと断定することはできないが、その可能性は高いと言えるだろう。

もう一つ例を挙げると、ヴィトレに到着した翌日、ギヤスケル一行は念願のレ・ロシャエル (*Les Rochers*) 見学に出掛けるが、ギヤスケルはそれがスコットランドの城に似ているという印象を抱く。

Suddenly he turned into a field-road on our left; and in three minutes we were in full sight of *Les Rochers*. We got down, and looked about us. We were on the narrow side of an oblong of fine delicate grass; on our right were peaked-roofed farm

buildings, granaries, barns, stables, and cow-houses; opposite to us, a thick wood, showing dark in the sunlight; in the corner to our left was the house, with tourelles and tower, and bits of high-roof, and small irregular doors; a much larger and grander building than I had expected; very like the larger castles in Scotland. (F381-82)

一方、マレー社のガイドブックには “In many points the country bears a strong resemblance to Scotland” (114) という記述がある。これも「フランスの生活」の背後にマレー社のガイドブックの存在を感じさせる部分のひとつである。

このように、ギヤスケルのフランス旅行は 19 世紀に旅行のありかたを大きく変えた鉄道と海外旅行ガイドブックによってある程度方向づけられた旅だった。旅行者が訪れる場所、経路、目にする景色は、これら 2 つの旅のツールによって決まる部分が少なからずある。ヤギの革を着た農民や、レ・ロシャエルの例からも分かるように、ギヤスケル一行はガイドブックの記述をまるで確認するかのよう旅先の土地の人々や風景を眺めている。

3. 旅の楽しみ方 — フランスの田舎と都会

次に、ギヤスケルがどのようにフランス旅行を楽しんだのか見ていきたい。彼女のフランスの楽しみ方は、どのくらい時代の風潮と重なっていたのだろうか。ギヤスケルはフランスの田舎と都会、両方での滞在を楽しんでいるが、田舎と都会では楽しみ方が異なっている。パリでは、滞在している友人宅を拠点に様々な人々と交流をもったり、フランスの家庭生活の細々とした習慣を観察したりしている。一方、田舎では、異国情緒あふれる風景や廃墟見学を楽しんでいる。このギヤスケルの態度には、最新のパリの生活習慣への関心と、中世に逆戻りしたようなエキゾチックな世界への憧れが反映されていると言えるだろう。このようにフランスを地域によって別の角度から眺める態度は、ギヤスケル特有のものではなく、以下に示すように当時の中産階級の女性に広く共有されていたのではないと思われる。

当時、中産階級の女性にとっても人気のあった女性誌『英国婦人生活画報』(*The Englishwoman's Domestic Magazine*) と、「フランスの生活」のフランスに関する記事を比べてみよう。『英国婦人生活画報』は 1852 年、サミュエル・ビー

トン (Samuel Beeton) によって創刊され、1877 年まで続いた雑誌である。サミュエル・ビートンは 1861 年に刊行された大ベストセラー『ビートン夫人の家政手引書』(*Mrs. Beeton's Book of Household Management*) の著者イザベラ・ビートン (Isabella Beeton) の夫だった。この女性誌は月刊で、価格は 2 ペンス、挿絵入り 32 ページという体裁で、内容は、物語、外国に関する情報、料理レシピ、家庭の医学、読者投稿欄、美容法、裁縫教室、ファッションプレートなど非常に多彩だった。主な読者層は中産階級の女性で、全体的に「女性の領分は家庭」とする保守的な傾向の強い雑誌であったと考えられている。『デイリー・テレグラフ』(*Daily Telegraph*) は「大英帝国の雑誌の中で、わずか 1 年で最大の読者層を獲得した」雑誌と位置づけている (中島 3-4)。ギヤスケルと同じ階級の女性たちが当時フランスにどのような関心を寄せていたのかを探るには適切な資料だと言えるだろう。

「フランスの生活」には田舎対都会 (パリ) という構図が見られる。都会に関しては、ギヤスケルの関心はもっぱら最新の生活情報にある。彼女のパリ滞在の記述の大半はパリの日常生活に関する最新の情報に割かれている。例えば、1862 年 2 月の記述は、訪れた友人 A 夫人宅の間取りや、調度品の配置の説明から始まり、続いて滞在先のフラットでのさまざまな生活のしきたりが語られている。

We are staying with a French family of the middle class; and I cannot help noticing the ways of daily life here, so different from those of England. We are a party of seven; and we live on the fourth floor, which is extensive enough to comprise the two sitting-rooms, the bedrooms, the kitchen, and the chamber for the two maids. I do not dislike this plan of living on a flat, especially as it is managed in Paris. (F 362)

このようにギヤスケルは、イギリスと比較しながらパリの日常生活を様々な側面から紹介していく。パリ特有のコンシェルジュの存在、女主人と使用人の関係、使用人の役割、食事のとり方、余暇の過ごし方、訪問客の迎え方というように。また、同じ年の 3 月 10 日の記述は、家庭でのお金の使い方に焦点が当てられている。物価、使用人の給料、買い物の仕方などが順に詳しく解説され、フランスの女性の衣服への執着もエピソードを交えながら語られる。これらのパリに関する

る記述の箇所では、当時の女性の暮らしぶりが過去のフランスの女性、あるいは同時代のイギリスの女性の暮らしぶりとの比較において紹介されていて、その描写の細やかさには、質の高いリアリズム小説を書いたギヤスケルの優れた観察眼と表現力がよくあらわれている。

それでは、『英国婦人生活画報』のパリに関する記事にはどのようなものがあるのだろうか。「フランスの家政」(“French Housekeeping”)という記事を見てみよう。この記事にはパリとロンドンの家事の仕方の違いがコミカルな軽いタッチで描かれている。冒頭は“Housekeeping in Paris is a very different performance from housekeeping in London; and the difference between them is exactly that between London and Paris, a Briton and a Gaul” (E IV 135) となっており、続く部分では、買い物の仕方の違いが例としてとりあげられている。イギリス人はまるで悪いことでもしているかのようにコソコソと食料品を買うのに対し、フランス人は人の目などおかまいなしに大声で、身振り手振りを交えながら買い物をするが、それはまさにそれぞれの国民性を反映しているのだ、と。ギヤスケルもフランスの日常生活のさまざまな習慣をイギリスと比較していたが、どちらも最終的には国民性の違いに話が落ち着いているところが共通していると言えるだろう。リンダ・コリー (Linda Colley) は、『イギリス国民の誕生』(*Britons: Forging the Nation 1707-1837*)において、18世紀から19世紀前半に形成された「イギリス人意識」にはフランスへの対抗意識が大きく影響したと指摘したが、フランスとの差異によってイギリス人らしさを確認しようとする傾向は、ギヤスケルの「フランスの生活」や『英国婦人生活画報』の記事を見る限り、ヴィクトリア時代に入ってもなお続いていたようだ²。

一方、フランスの田舎に関する記述はパリとは全く趣の異なるものである。まずは、ギヤスケルが訪れたブルターニュが当時どのような場所としてイギリスに紹介されていたかを確認したい。マレー社のフランスのガイドブックのブルターニュのセクションの最初のページには、地形の特徴が“Proceeding westward, the smiling pasture-lands of Normandy are gradually exchanged for the rocky ravines, the rolling landes, and small inclosures of Brittany” (114) と述べられていて、“picturesque”という単語が何度か使われている。また“In civilization it is behind almost every other part of France: its inhabitants are of Celtic origin; speaking a Language of their own,

allied to the Welsh and Cornish” (114) と書かれている。“primitive”、“antique”、“quaint”、“picturesque”、“Gothic”などの形容詞が用いられていることから、ブルターニュがまさにゴシック小説の舞台にうってつけの、古風で異国情緒あふれた風景に満ちた場所として紹介されていることが分かる。ゴシック小説も書いているギヤスケルにとって、ブルターニュは創作意欲を大いにかきたてられる場所だったのでないかと想像される。

「フランスの生活」で、ギヤスケルはヴィトレに降り立った時の印象を次のように書いている。

The town, on the contrary, is ancient, picturesque, and deserted. There have been fortified walls all round it, but these are now broken down in many places, and small hovels have been built of the débris wherever this is the case, giving one the impression of a town stuffed too full, which has burst its confines and run over. Yet inside the walls there are many empty houses, and many grand fortified dwellings, with coats of arms emblazoned over the doorway, which are only half occupied. (379)

これは、ヴィトレの駅は真新しく小奇麗だったという記述に続く部分である。ギヤスケルの目に飛び込んできたのは、中世で時が止まってしまったかのような町と、最新の科学技術の成果である鉄道の真新しい駅が併存する、どこか不調なヴィトレの光景だった。建てられたばかりの駅の存在によって、これからこの田舎町が次第に観光地化されていくことが暗示されているようにも思えるが、ギヤスケルがヴィトレを訪れたのは、まだそれが予感にすぎない時期だった。

「フランスの生活」と同様に、『英国婦人生活画報』にも田舎対都会という構図が見られる。「ロレーヌ地方の田舎の結婚式」(“A Rural Wedding in Lorraine”)という記事は、著者がロレーヌ地方を旅行しているときに偶然目にした結婚式の様子を詳細に報告したもので、その第2パラグラフではロレーヌ地方について説明がなされている。要約すると次のようになる。ロレーヌ地方は首都から遠く離れたフランスの未開の地で、この地方の習慣はいまだに中世の面影を色濃く残しているけれども、鉄道網の広がりによって日に日に首都との距離が縮まっているので、間もなく変化してしまうだろう。そして、近い将来、ブルターニュやベリー(Berry)、

ロレーヌの習慣や儀式は、子孫からは遠い昔の幻にすぎないと思われるようになるだろう (E III 39)。つまり、今はまだパリと地方とでは大きな差があり、地方は中世の段階で止まっているような状態だけれども、鉄道の発達により間もなく文明化の波が押し寄せるだろうから、その前に古くから続く習慣を記録に遺しておこう、ということである。この一節には、「フランスの生活」では真新しい駅とさびれた町のコントラストに象徴されていたことが具体的なかたちで述べられている。どちらの記述もフランスの田舎に対して中世にタイムトラベルしたかのような経験を期待しながら、それがそう遠くない未来に失われていくであろうことを予感しているようだ。

4. おわりに

これまでみてきたように、ギヤスケルのフランス旅行は、当時においては最新の旅のツールだった鉄道と海外旅行ガイドブックによって、訪れる場所、経路、目にする景色があらかじめ設定されていた旅だった。ギヤスケル一行は、鉄道の走る決められたルートを通り、ガイドブックで紹介されているホテルに泊まり、ガイドブックを片手に名所を訪れた。彼女たちは、ガイドブックの記述をまるで確認するかのように、その土地に暮らす人々の様子や風景を眺めている。

ギヤスケルのフランスの楽しみ方は、当時の風潮とぴったり重なっていたように思われる。ギヤスケルはフランスの田舎と都会、両方での滞在を楽しんでいるが、田舎と都会では楽しみ方が異なっている。田舎では、中世に逆戻りしたかのようなエキゾチックな世界への憧れをのぞかせながら、異国情緒あふれる風景や廃墟見学を楽しんでいる。都会では最新のパリの生活習慣に眼を向け、社交にいそんでいる。このようにフランスを地域によって別の角度から眺める態度は、ギヤスケル特有のものではなく、『英国婦人家庭画報』の記事にも共通して見られるものである。

本論では詳説しなかったが、「フランスの生活」には他にも大きくとりあげているものがある。ギヤスケルが知人の2人の女性から聞いたフランス革命の思い出話と、旅先の宿で借りた本をもとに再構成したガンジュ侯爵夫人の陰惨な殺害事件の話である。これら2つはゴシック小説の一部となっても不思議ではないような雰囲気、劇的でおどろおどろしいエピソードとなっている。

ギヤスケルの「フランスの生活」は、当時の最新のパリの生活に関する情報と田舎のピクチャレスクな風景描写、ゴシック小説を思わせるドラマチックなエピソードの3つの要素が組み込まれている彩り豊かな作品である。ギヤスケルは優れたリアリズム小説とゴシック小説の両方を書いているが、「フランスの生活」はそんな彼女の作家としての好みがよくあらわれている旅行記と言えるだろう。

注

本稿は、日本ギヤスケル協会第23回大会（2011年10月2日、於江戸川大学）における研究発表に基づいている。

- 1 *Works of Elizabeth Gaskell, vol.1, Journalism, Early Fiction and Personal Writings*, ed. Joanne Shattock (London: Pickering & Chatto, 2005), p.379. “French Life”からの引用はその直後に括弧に入れた略語 F と頁数を本文中に記す。
- 2 Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (New Haven: Yale UP, 1992) の序文参照。

参考文献

- Beeton, Isabella, ed. *The Englishwoman's Domestic Magazine: The Reprint of the Mid-Victorian Ladies Journal, 1852-56*. 4vols. Osaka: Eureka Press, 2005.
- Brendon, Piers. *Thomas Cook: 150 Years of Popular Tourism*. London: Secker & Warburg, 1991.
- Chapple, John A.V. *Elizabeth Gaskell: A Portrait in Letters*. Manchester: Manchester UP, 1980.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. New Haven: Yale UP, 1992.
- Fraser, Hilary, Stephanie Green and Judith Johnston. *Gender and the Victorian Periodical*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Gaskell, Elizabeth. “French Life.” *Works of Elizabeth Gaskell, vol.1, Journalism, Early*

- Fiction and Personal Writings*. Ed. Joanne Shattock. London: Pickering & Chatto, 2005. 357-409.
- Hamilton, Jill. *Thomas Cook: The Holiday-Maker*. Stroud: Sutton Publishing, 2005.
- A Handbook for Travellers in France, Alsace, and Lorraine: Being a Guide to Normandy, Brittany; the Rivers Seine, Loire, Rhône and Garonne; the French Alps, Dauphiné, the Pyrenees, Provence, and Nice, &c. &c. &c.; the Railways and Principal Roads*. London: John Murray, 1873.
- A Handbook of Travel-Talk: A Collection of Questions, Phrases, and Vocabularies, Intended to Serve as Interpreter to English Travellers in Germany, France, or Italy, or to Foreigners Visiting England*. London: John Murray, 1851.
- Lister, W.B.C. *A Guide to the Microfiche Edition of Murray's Handbooks for Travellers*. University Publications of America, 1993.
- Matus, Jill L., ed. *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Pollard, Arthur, and J.A. V. Chapple, eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Tombs, Robert, and Isabelle Tombs. *That Sweet Enemy: The French and the British from the Sun King to the Present*. London: Pimlico, 2007.
- Vaughan, John. *The English Guide Book c.1780-1870: An Illustrated History*. North Pomfret: David & Charles Inc, 1974.
- Williamson, Andrew. *The Golden Age of Travel: The Romantic Years of Tourism in Images from the Thomas Cook Archives*. Peterborough: Thomas Cook Publishing, 1998.
- Yarrow, Philip. "Mrs Gaskell and France." *The Gaskell Society Journal* 7 (1993): 16-36.
- 中島敏郎「ビートン夫妻のヴィクトリア朝婦人生活画報 別冊日本語解説」大阪、ユーリカ・プレス、2005.

(実践女子大学専任講師)

Abstract

Traveling with Murray's Handbook
—Tourism in Gaskell's "French Life"—

Rie SHIDOOKA

Traveling was one of Elizabeth Gaskell's diversions. She visited not only many places in Britain, but also foreign countries such as Italy, Germany and France. France was her favorite country, and she went there several times from 1853 to 1865. Her "French Life", which was published in *Frazer's Magazine* between April and June 1864, is her diary of two journeys to France. This series of three articles includes the descriptions of the domestic life of a French family of the middle class in Paris and of her excursion to Brittany, and the tragic tale of the murder of Madame la Marquise de Gange.

The purpose of this paper is to examine the influence of tourism on Gaskell's "French Life". Little attention has been given to this point so far. Did she enjoy the travel by train? How did she make use of Murray's *Handbook for Travellers in France, Alsace, and Lorraine*?

This paper attempts to show that Murray's handbook played an important role when Gaskell decided what to see and do during her stay in France. The handbook directed her attention to the objects and scenery which it recommends seeing, and even taught her how to appreciate them.

